

# 人間の条件の顛倒

——ミシエル・アンリ『キリストの言葉』

武 藤 剛 史

はじめに

ミシエル・アンリはもともと哲学者であり、彼の処女作にして主著とも言うべき『現出の本質』（一九六三）は、フッサールによって創始された現象学の方法を踏まえた厳密な哲学的著作である。たしかに、『現出の本質』にも、キリスト教およびキリスト教神秘思想（とくにエックハルト）への言及はあるが、正面からキリスト教思想を取り上げているわけではない。彼がキリスト教に正面から向かい合うようになったのは、『われは真理なり——キリスト教哲学のために』（一九九六）であり、それに引き続き『受肉——〈肉〉の哲学』（二〇〇〇）、そして彼の遺作となった『キリストの言葉』（二〇〇二）が書かれる。このように、アンリの晩年の思索は、キリスト教に集中しているのであるが、それが何を意味しているかは、さまざまな解釈があり得るだろう。素直に考えれば、アンリ哲学の到達点がキリスト教であった、ということになるが、見方によっては、アンリ哲学の変質ないしは逸脱とも考えられようし、あるいは、アンリがキリスト教を強引にみずからの哲学に引き寄せてしまったとも考えられよう。こうしたことは、哲学的観点からすれば非常に興味深い問題であろうし、またキリスト教の側からしても、けっして看過できない問題であろう。

しかし、ここではそうした問題には立ち入らない。ここで試みようとしているのは、アンリの最後の著書である『キリスト

人間の条件の顛倒

の言葉』を、その内部から、つまりは著者の視点に立つて、著者の論理に沿って、読み解くということである。もともと筆者は、哲学に関してまったくの素人であって、アンの著作を哲学書としてではなく、あくまでひとつの人間論として読んできた。また筆者は、キリスト教に関心を持ってはいるが、いずれかのキリスト教会に属しているというわけではなく、目下のところは、キリスト教をもひとつの人間論として考えるにとどまっている。こうした自由な立場、いわば立場なき立場から、『キリストの言葉』をあくまでひとつの人間論として読み取ってゆきたい。つまり、そこに展開されている人間論がいかによ当性と説得性を持つかということだけに焦点を絞って考察してみたいと思うのである。

テキストは以下を使用した。

Michel Henry, *Paroles du Christ*, Seuil, 2002

## (一) 始原としての〈いのち〉

現われなければ、何もものわれわれにとつて存在しない。現われることこそが、すべての始まりであり、根源である。それは現象学の創始者であるフッサールの根本洞察であり、さらにその洞察はフッサールの偉大なる継承者にして批判者でもあるハイデガーの〈存在〉の思想にも確かに受け継がれている。ミシェル・アンリもまた、この根本洞察を受け継いでおり、それゆえに彼の哲学もまた基本的には現象学なのである。しかしアンリは、フッサールおよびハイデガーを根本的に批判する。そしてこの批判にこそ、アンリ哲学の核心が潜んでいる。その批判は、フッサールも、ハイデガーも、すべての始原としての現われを世界の現われであるとしていることに向けられている。たとえば、フッサールの基本概念である意識の志向性とは、対象としての世界の現われを前提にしなければあり得ない考えである。ハイデガーの存在の思想の場合もまた、〈存在〉が在らしめるのは何よりも先ず世界であると考えられている（彼は「世界の開け」という言い方をする）。要するに、両者とも、ま

ずは世界の現われがあるとする点では共通しているのである。それに対してアンリは、現われることがすべての始原であり、根源であるとしても、そのすべての始原であり、根源であるところの現われとは、世界の現われなのではないと考える。アンリによれば、世界の現われ以前に、あるいは世界の現われの背後に、もうひとつ別の現われがある。そして、その別の現われとは〈いのち〉の現われにほかならない。

そもそも、何かが現われるには、まずもって「現わす」という働きが必要である。そして、すべての始原としてのこの「現わす」という働きを、アンリは〈いのち〉と呼ぶのである。それにしても、なぜ〈いのち〉なのか。たしかに、何かを現わす働き、つまりは何かを存在せしめる働きとは、ハイデガーの言うところの〈存在〉に近い。それならば、アンリは、ハイデガーに倣って、なぜそれを「存在」と呼ばないのか。それは、先にも見たように、ハイデガーの〈存在〉とはあくまで世界を存在せしめる働きとされているからである。つまり、〈存在〉が人間とは切り離された中性的ないし非人称的な働きであるとされているのに対して（たしかに、ハイデガーは人間を現存在、つまりは〈存在〉が世界を現わす場としていては、〈存在〉そのものは人間とは無関係に働いている）、アンリが考えるすべての始原としての現われは、人間自身により深く結びついている。というよりも、その始原としての現われは、人間自身の内部、われわれ自身の根底から立ち現われるのである。じつさい、何が現われるにしても、それは誰かに対して現われるのであって、この現われを感じるどころの主体なくして、現われるということは意味をなさない。つまり、「現われ」とはそもそもその初めから、それを感受する主体とともにあるのであって、「現われ」の現われとそれを感受する主体の現われは同時にして同一の現象なのである。このように、すべての始原としての現われには、すでに主体性が、つまりは自己性が含まれている。ところで、自己性とはいのちの本質である。自己性を持ったなごいものちというものはあり得ない。あるいはむしろ、自己性を持つことがいのちのいのちたる所以である。このように、世界の現われ以前に、〈いのち〉の現われがあつたのであり、世界は〈いのち〉の内部においてしか現われることはない。人間に世界が現われるのも、人間がいのちを与えられた存在だからである。つまり、人間にいのちが与えられたからこそ、その人間にいのちの内部において、はじめて世界が現われ、存在するのである。このように、普通考えられているのは逆に、人間はあらかじめ存在する世界の中で誕生するのではない。人間は〈いのち〉から直接生まれたのであって、世界の中から、世界の一

部の存在として生まれたのではない。存在論的に言えば、人間の誕生は世界の誕生に先行する。人間の起源は世界にはなく、〈いのち〉そのものにある。このように、〈いのち〉の現われがなければ、何ものも現われなし、そもそも人間自身が存在しない。それゆえにこそ、すべての始原としてのこの現われを、アンリは〈いのち〉と呼ぶのである。

ところで、〈いのち〉がすべての始原であるとすれば、〈いのち〉を超える何ものも存在しないのであり、したがって、〈いのち〉は他の何かによって生み出されたものでもあり得ない。〈いのち〉は自分をみずから生み出すのであり、また自分をみずから現わすのである。アンリはそうした事態を「自己産出」あるいは「自己啓示」と呼んでいる。

「〈いのち〉の自己産出〔auto-génération〕とは、いのちがいのちであることと条件、つまりは自分自身を感じ取るという条件のもとに、いのちが到来するということである。ところで、自分自身を感じ取るということは、いのちの中に自己性というものが出現しないかぎり、およそあり得ないことである。いのちはこの自己性においてこそ、みずからみずからに啓示するのであり、このみずからの啓示、つまりは自己啓示〔auto-révélation〕において、いのちは〈いのち〉になる。」(p.106)

逆に言えば、自己産出ないし自己啓示の能力をみずからに備えているからこそ、このいのちは絶対であり、無限であり、永遠なのである。そして、すべての始原ないし根源にこうした〈いのち〉の働きがあるとすれば、この〈いのち〉こそ、あらゆるものの究極の根拠としての真理そのものであることになる。

「いのちが真理であるのは、いのちがみずからみずからに啓示する、この自分自身の啓示——つまりは自己啓示——がおよそ考え得るあらゆる真理の基盤となるからである。じつさい、われわれに現われなにかぎり、何ものもわれわれにとつて存在しない。しかしそのためにはまず、現わすこと自体が現われなければならない。つまり啓示自体が啓示されなければならないが、〈いのち〉の本質そのものと言ってよいあの自己啓示においてなされているのは、まさしくそのことなのである。」(p.98)

ともあれ、〈いのち〉がすべての始原ないし根源であるとすれば、この〈いのち〉を神と呼ぶこともできよう。少なくとも、キリスト教における神とは、この〈いのち〉の別名なのであって、キリストとは、この〈いのち〉にあらかじめ内在する自己性にほかならない、というのがアンリの根本洞察である。つまり、キリストとは「神の神みずからについての認識以外の何も

のでもなく、「絶対の〈いのち〉の自己啓示そのもの」(p.114)である。それゆえにこそ、キリストは神の〈言〉であるときれる。「ヨハネによる福音書」のプロローグが語っているのも、まさしくそのことである。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」

このプロローグの内容を、アンリはつぎのように言い換えている。

「〈いのち〉は〈最初の生ける者〉をみずからの内に生み出し、彼を通じてみずからを感じ取り、みずからをみずからに啓示する。その自己啓示こそ〈言〉であり、〈神の言葉〉にはかならない。まさにそれゆえにこそ、この〈言〉、すなわち〈いのち〉の原啓示は、それ自体として、真実なのである。それは原初的かつ絶対的な〈真理〉であり、他のすべてはこの〈真理〉に依存している。」(p.143,4)

## (二) 〈いのち〉と人間

言うまでもなく、人間とは生きている存在である。では、生きているとは、どういうことだろうか。一般に考えられているのは、みずからの力で動く、みずからの存在をみずから制御しつつ維持し続ける、といったところであろう。しかし、それだけのことであれば、自動車やロボットにも可能である。そうした機械から人間を区別するのは、人間が自己すなわち〈私〉を有するのに対して、そうした機械は自己<sup>II</sup>〈私〉を持たないということである。言い換えれば、機械はみずからを意識しない、みずからを感じたり、知ったりしないということである。このように、生きているとは、何よりもまず、〈私〉を有すること、あるいはむしろ〈私〉であること、であるが、それでは、その〈私〉はどのようにして出現したのであるか。これについても、一般的に考えられているのは、以下のようなことであろう。すなわち、最初は単細胞として誕生した生物が、やがて複数細胞となり、それぞれの細胞の機能が特化して神経が生じ、それが複雑化して神経系となり、さらにそれが脳に進化し、その

脳の複雑な働きの中から〈私〉が生まれたのだ、と。しかし、はたしてそうだろうか。神経が、あるいは脳の働きが、どれほど複雑化してゆくとしても、それはあくまで刺激と反応という因果関係にもとづくメカニズムのレベルでの、つまりはどこまでも受動性のレベルでの、複雑化に過ぎないのであって、じつさい、そのような働きはコンピュータでも十分可能である。しかし、さまざまな複雑な機能を備え、人間をはるかに超える情報処理能力を持つコンピュータであっても〈私〉であり得ない、つまり、みずから意識し、みずから感じたり、知ったりすることはできない。ということはすなわち、〈私〉であるとは、神経や脳の複雑化などとはまったく次元を異にする事柄だということである。

どんなに単純で基本的な知覚、たとえば「見る」、「聴く」、「感じる」といったことであっても、それを感じる当の主体が存在しなければ、まったく意味をなさないと言えるが、この当の主体とは〈私〉以外にはあり得ない。また、「苦しい」、「心地よい」、「うれしい」、「悲しい」などの感情にしても、そうした感情を受ける、あるいは味わう〈私〉なくして、まったく意味をなさない。そもそも、「見る」、「聴く」、「感じる」といった知覚、そしてまた「苦しい」、「心地よい」、「うれしい」、「悲しい」などの感情、そうした知覚や感情を持つことが生きることなのであって、そうした知覚や感情はもとも生きるということに、つまりはいのちそのものに内在している。したがって、そうした知覚や感情の主体である〈私〉もまた、いのちの本質的要素として、あるいはまさしくいのちそのものとして、いのちの誕生ととともにあつたのである。

〈私〉は、いかなる物質的現象からも生ずることはあり得ない。いかに生化学が発達し、遺伝子技術が進んだとしても、それによつてある特徴を備えた肉体やある特殊な能力を持った人間を生み出すことは可能かも知れないが、〈私〉を生み出すことだけは絶対に不可能である。先にも述べたように、肉体を生み出したり、ある能力を付与したりすることと、〈私〉を出現させることとは、まさに次元の異なる問題なのである。〈私〉とは、あるかないか、すべてかゼロか、要するに生か死か、という形においてしかあり得ないのであって、〈私〉はまさしくゼロから、つまりは無から、忽然と現われるほかないのである。キリスト教では「無から創造」ということが言われるが、それは何よりも先ず、〈私〉に当てはまるだろう。そもそも、〈私〉なくして、〈私〉の生きる世界は存在しない。〈私〉が死ねば、〈私〉の生きる世界も消滅する。というのも、先にも見たように、世界が存在するには、つまりは世界が現われるには、その現われを感受する主体が必要であつて、この主体が存在しなければ、

世界は現われることはなく、したがってまた、この主体なくして世界は存在し得ない。〈私〉は世界の中に、世界の一部として存在するのではなく、それゆえ〈私〉の存在は世界の存在に依存するものではない。むしろ世界こそ、その存在を〈私〉に負っているのだ。

むしろ、常識的に言えば、そのようなことは考えられない。世界そのものは、それを生きるひとりひとりの主観を超えて、その外部に存在するのであり、ひとりの人間が死んだからといって、世界そのものはそれまでとまったく変わらずに存在し続けると考えられている。だがはたして、ひとりひとりの主観を超えた客観的世界なるものが、ほんとうに存在するのだろうか。たしかに、そうした世界を想像したり、想定したりすることは可能である。しかしそうした客観的世界を想像し、あるいは想定するにしても、われわれは視覚的、聴覚的、触覚的なイメージに頼るほかないのであって、いわゆる客観的時間・空間の構成ですら、結局のところ、われわれの知覚や感覚に基づいていると言わざるを得ない。そして、その知覚や感覚というものは、先にも述べたように、〈私〉なくしては成立し得ない。要するに、客観的世界なるものは、われわれひとりひとりが具体的に生きている世界、つまりは〈私〉の世界を抽象して構成された虚構（フィクション）以上のものではないことである。

〈私〉の世界、つまりはわれわれが知覚し、感受する世界以外に、世界というものはあり得ないことを、別の角度から述べてみよう。まずは、〈今〉と〈ここ〉が存在しないような世界というものが考えられるかどうか、たとえ考えられるとしても、そのような世界にどれほどの意味と現実性があるのか、と問うてみればよい。あるいは、特定の視点から見るのではない世界というものが存在し得るのか、と問うてもよい。言うまでもなく、そのような世界とは、まったくのカオス、まったくのナンセンスというほかないだろう。それでは、〈今〉と〈ここ〉というものは、また特定の視点とは、何に基づくのだろうか。それは〈今〉、〈ここ〉にいる〈私〉に基づいており、特定の視点とは〈私〉の視点以外ではあり得ない。このように、世界とはわれわれひとりひとりが生きる世界であるほかなく、それ以外に世界というものはあり得ない。そして、われわれひとりひとりが生きる世界とは、すなわちわれわれが知覚し、感受する世界ということであり、その世界の拡がりとは、われわれの自己と〈私〉の拡がりにびたりと重なる。このように、われわれはそれぞれに自分だけの世界、いわば「個人という世界」に生きているのである。

以上のことを、ヴァイトゲンシュタインはつぎのように言い表している。

「世界とは私の世界である。」

「私とはわたくしの世界にほかならぬ。」

「世界と生は一である。」

「主体は世界に属さない。それは世界の限界なのだ。」

以上の言葉は、いずれも『論理哲学論考』（藤本隆志、坂井秀寿訳、法政大学出版社、一六九―一七〇頁）に見られるが、『草稿一九一四―一九一六』（『ヴァイトゲンシュタイン全集Ⅰ』大修館書店、二七二頁）にも、つぎのような記述が見られる。

「歴史が私にどんな関係があるう。私の世界こそが、最初にして唯一の世界なのだ。」

あるいは、「私の世界こそが、最初にして唯一の世界なのだ」などとうそぶくのは、当のヴァイトゲンシュタイン自身にしか意味のない言葉であつて、それ以外の人間にはまったく関係のない話だと反論することもできよう。ところが、そのように批判する人間もまた、彼自身の世界、彼自身の〈私〉の世界に生きており、しかも、その世界から一步も外に出られないのである。人間はそれぞれに自分だけの世界、それぞれの〈私〉の世界を生きているのであつて、それらの世界と世界の間にはまさに無<sup>ニ</sup>死の深淵が広がっている。他者（隣人と言つてもよいが）はわれわれがけつして入り込めない別の宇宙を生きている。というより、他者（隣人）とは別の宇宙にほかならない。

このように、「世界とは私の世界なのだ」とすれば、そして「主体は世界に属さない」、「それは世界の限界なのだ」とすれば、この主体<sup>ニ</sup>〈私〉そのものはいったいどこからどのように生じたのであろうか。むろん、われわれがそれぞれの〈私〉としてしかあり得ず、それぞれの〈私〉の世界の中から出られない以上、〈私〉の由来や起源は、われわれにとって永遠の謎でしかあるまい。ただし、そのような〈私〉は、いかなる意味においてであれ、世界から生まれたのではないことだけは確かであるう。この点について、永井均はつぎのように述べている（『私の存在の比類なさ』勁草書房、五八―五九頁）。

「〈私〉であるという奇跡が（人）の持ついかなる物理的・心理的諸性質によつても規定され得ない（それゆえ、いかなる物理的・心理的諸性質を持った人間の創造も、〈私〉の創造とは別次元の出来事にすぎない）のと同様に、〈私〉であり続ける

という奇跡は、〈人〉としてのいかなる物理的・心理的連続性によっても保証されない（それゆえ、いかなる物理的・心理的諸性質のいかなる連続も、〈私〉の保存とは別次元の出来事にすぎない）。それゆえ、デカルトがここで連続的創造説を打ちだしたのは、唐突なことでも、（スコラ哲学への）妥協的なことでもなく、理の当然のことであった、と私には思われる。そしてこの場合、創造者がたとえスピノザ的な「神あるいは自然」ではなかったことも、また理の当然であったと言わなければならぬ。「自然」は、特定の諸性質を持った人間を生み出せるだけだからである。デカルトは「両親」（言い換えれば精子と卵子）に触れて、次のように書いている。

（最後に両親について言えば「…」彼らは明らかに私を保存していないし、また、私が思うものであるかぎり、いかなる意味においても、私を作り出しもしなかった。彼らはただ、私が、すなわち精神が——いま私はただ精神のみを私として認めているのだが——それに内在していると私が判断するところのあの質料のうちに、ある種の資質を置いたにすぎない。）（『省察』第三省察第三四段）

〈私〉の存在は奇跡的な出来事であるから、その創造者は「神」でなければならない。」

「〈私〉の存在は奇跡的な出来事であるから、その創造者は「神」でなければならない」というのはいささか唐突な感じもするだろうが、〈私〉というものが、それなくしては一切が存在し得ない何ものであるとすれば、そうした〈私〉はまさに無から生まれたとしか言いようがなく、そのように無から〈私〉を生み出した創造者は「神」をおいてほかにはあり得ない。そもそも、無からすべてを生み出す者というのが「神」の定義なのだから。

それにしても、神はいかにして〈私〉を、つまりは人間を生み出したのであろうか。むろん、われわれはそれぞれの〈私〉から抜け出せない以上、またそれぞれの〈私〉の世界しか知り得ない以上、そのような〈私〉を生み出した神と、いかなるものを知ることが原理的にあり得ない。しかし、もつともありそうなこととして言えるのは、〈私〉を生み出した神とは、ほかならぬ〈私〉に似た者、言い換えるなら、いのちを保持する生ける者である、ということであらう。つまり、人間にいのちを与え、〈私〉を与える者は、彼自身、いのちであり、〈私〉である者だらう、ということである。神はみずからのいのちを、そしてみずからの〈私〉を、人間に与えたのであり、また今もなお、与え続けている。少なくとも、それがキリスト教の基本的考えである

「神はご自身にかたどって人を創造された」、「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」、創世記)。フオイエルバッハは、そうしたキリスト教の神、つまり〈私〉である神、人格神を、人間がみずからの人間性を理想化して作り上げた幻想に過ぎないと批判したが、そうした批判こそ、じつは人間中心主義が生み出したきわめて一面的にして皮相な神観に過ぎないだろう。むしろ、人間というものがあり得ること、つまりは〈私〉という生ける者があり得るといふことの奇跡を真に自覚するならば、そのような存在を在らしめる神自身が、いのちであり、〈私〉であると考えるのは、きわめて理に適っていると見えよう。

神は絶対の〈いのち〉であり、それゆえに絶対の〈私〉である。人間のいのち、そして人間の〈私〉は、神自身であるところの絶対の〈いのち〉、絶対の〈私〉から直接生まれたものである。言い換えれば、神は、絶対の〈いのち〉であり絶対の〈私〉である自分自身を人間に無償で与えたのである。そう考える以外に、人間という存在、〈私〉という存在を合理的に説明することは不可能であろう。アンリはつぎのように言う。

「人間とは神自身である目に見えない絶対の〈いのち〉において生み出された生ける者である。しかも、このいのちは、人間が生きているかぎり、人間のうちにとどまるのであって、このいのちの外では、いかなる生ける者も存在し得ない。それゆえにこそ、人間は〈神の子〉と言われるのである。神自身であるこの絶対の〈いのち〉は、絶えることなく、人間に「生きること」を恵み続けてくれている」(p.54)

「自分みずからをいのちにもたらす能力を有する全能の〈いのち〉、この唯一絶対なる〈いのち〉、神自身である〈いのち〉だけが、あらゆる人間にその息吹を伝えて、彼らを生かす。だからこそ、人間は真実かつ絶対なる意味において〈神の子〉なのである。」(p.47)

「人間の起源は神の内であり、その本性は神の本性に由来する。人間を生ける者として生み出し、人間の内には存在しないのちを人間に与えることよって、神は自分のそれと同じ本性を人間に与えたのである。その本性とは、いのちそのものの本性にはかならない。〈神はご自身にかたどって人を創造された。〉」(p.55)

そしてまた、すでに見たように、いのちが与えられるとは、〈私〉≡〈自己〉が与えられることと同義である。

「それぞれの〈自己〉が生み出されるのは、あくまで絶対の〈いのち〉の〈自己〉において、その〈言〉において、なので

ある。〈万物は言によって成った……〉。かくして人間は、〈言〉によって成った存在として、〈いのちの真理〉に属する。(p.146)  
人間が〈私〉 Ⅱ 〈自己〉を持つ存在、つまりはあらゆるものを知覚し感受すると同時に、自分自身を知覚し感受する存在であり得るのも、人間が絶対の〈いのち〉の内にいるからであり、しかもまた、この絶対の〈いのち〉の本質が自己啓示ということにあるからである。

「人間が〈神の子〉であるということとは、人間はいのちにおいて生み出された存在であり、それゆえに、人間のあり方そのものも、このいのちにおける誕生によって規定されているということの意味している。」(p.129)

「いのちにおいて在る生きる者は、さまざまな印象、情感、活動、思考を通じて、自分自身を感受するが、これらの印象等は、絶対の〈いのち〉の自己啓示を通じて、つまりはその〈言〉において、それぞれの生ける者に与えられる。」(p.129)

以上が、人間という生ける者の誕生の秘密である。神という絶対の〈いのち〉を想定しないかぎり、人間という生ける者の存在を、つまりは〈私〉という比類なき存在を、合理的に説明することは不可能である。しかもこの考えこそ、アンリによれば、キリスト教の根本的教えなのである。

人間は有限の存在である。人間のいのちは有限であるし、人間の〈私〉も有限である。人間は自分みずからにいのちを与え、することはできないし、人間の〈私〉もみずからの力で存立しているわけではない。そうした人間の有限のいのちの背後には神の絶対の〈いのち〉が存在し、人間の有限なる〈私〉の背後には神の絶対の〈私〉が存在するのであって、だからこそ、人間はいのちを保ち続け、またひとりの〈私〉であり続けることができる。

「自分の内に生きる力を持たない者が、にもかかわらず生きていくのはいったいどうしてなのか。有限なるいのちは、自身のみ力だけではとうてい生きることができない。有限なるいのちは、みずからの内に生きる力を持たないからこそ、たえず自分にいのちを恵み続けてくれる無限のいのちの中でしか生きることができないのである。」(p.105)

人間が一個の〈私〉であるということも、つまりは人間の主体性そのものも、人間自身のみみずからの力によって自分自身に与えられたものではない。こうした人間の根本的条件において、人間はまったく無力であり、非力である。そうした意味において、人間は絶対に受動的な存在なのである。

「たしかに私はこれらの能力——目を開ける、手を伸ばす、身体全体を動かす——を意のままに駆使することができるとしても、これらの能力を、私自身に、つまりは私自身の自己、私自身の生に、与えたのは私ではない。」(p.120)

「それらの能力は、私の意志や私の力とはまったく無関係に、私に与えられたものなのである。では、いったいどうやって与えられたのか。私自身のいのち、私自身の自己が与えられたのとまったく同じ仕方、つまりは絶対の〈いのち〉の自己贈与を通して、である。」(p.120)

「〈私ができる〉[Je Peux]を実践していながら、しかも人間は本質的に無力である、というこの事実が意味しているのは、人間とは〈神の子〉にほかならないということであり、人間の諸能力のひとつひとつ、人間の自己、人間のいのち、それらはすべて、絶対の〈いのち〉の自己贈与を通じて、人間に与えられているということである。」(p.121)

人間は人間であることにおいて、絶対に受動的な存在である。じつさい人間は、みずから望んで生まれたのでもなければ、みずから望んだからといって生き続けることができるわけではない。しかしこうした絶対的受動性、つまりは絶対的な無力さを、必ずしもマイナス的、悲観的に考える必要はなからう。というのも、この受動性ないし無力さは、逆に見るなら、ひとりひとりの人間のいのちが神の絶対の〈いのち〉に包まれてあることを、そしてまた、ひとりひとりの〈私〉が神の絶対の〈私〉に支えられていることを意味しているからである。別の言い方をすれば、人間とは神自身であるところの絶対の〈いのち〉の自己贈与として恵まれた存在であり、人間が人間であることを支えているのは、神の無償の愛だということである。そうした意味において、人間存在の本質とは、神の愛そのものだとと言ってもよい。

「人間とは神の子以外の何ものでもない。人間の起源は神の内にあり、その本性は神の本性に由来する。人間を生ける者として生み出し、自分の内にしか存在しないいのちを人間に与えることによって、神は自分のそれと同じ本性を人間に与えたのである。その本性とは、いのちそのものの本性にほかならなう。」(p.55)

以上が「神はご自身にかたどって人を創造された」ということの、また「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」(「ヨハネによる福音書」ということの、真相である。

### (三) 〈いのち〉からの離脱

しかし人間は、普通、自分が絶対の〈いのち〉に生かされている、絶対の〈いのち〉に包まれているとは感じていないし、自分自身すなわち〈私〉の背後には絶対の〈私〉が潜んでいて、〈私〉をつねに支えているなどとも思っていない。その理由のひとつは、神の絶対の〈いのち〉が人間のいのちの根底であり、神の絶対の〈私〉が〈私〉の根底だからである。つまり、人間は自分のいのちから、また自分の〈私〉から抜け出して、その背後に回することはできないのだ。それはちょうど、眼が眼底を見ることができないのと同じことである。要するに、神自身であるところの絶対の〈いのち〉、絶対の〈私〉は、原理的に対象化し得ないのである。神は眼に見えないだけでなく、外部世界のどこにも存在しない。しかし、人間のいのちがかの絶対の〈いのち〉に繋がっており、〈私〉がかの絶対の〈私〉によって背後から支えられている存在であるとすれば、人間は、みずからの内部において、あるいはみずからの根底において、神を感じ、神を見出すことは可能はずである。事実、そのようにして、神を感じ、神を見出した人間も数多くいることは、過去二千年のキリスト教の歴史がおのずから証明しているだろう。

それゆえ、神という存在が目に見えない、あるいは対象化できないということだけで、われわれが神を信じていることができないうことの理由を説明することはできないだろう。むしろ、われわれが目に見えるものしか、対象化できるものしか、つまりは外部の世界しか、信じられない、あるいは信じられなくなっているということこそ、われわれが神を信じられないことの根本理由があると言わなければならない。だが、いったいどうしてわれわれは目に見えるものしか、対象化できるものしか、つまりは外部の世界しか、信じられないのか、あるいは信じられなくなってしまったのか。

それも、人間が自己Ⅱ〈私〉であること、つまりは人間が主体性を有する自由な存在として創造されたことに、根本の理由がある。先にも述べたように、人間が自己Ⅱ〈私〉であること、人間が主体性を有する自由な存在としてあること自体は、人間自身の力によるものではない。そうした人間存在の根本的条件はむしろ人間に課された運命そのものと言ってよく、その点において、人間はまったく無力であり、絶対に受動的な存在なのである。ところが、自己Ⅱ〈私〉として、つまりは主体性を有

する自由な存在として創造された人間は、意のままに振舞うことができ、また自分に与えられたさまざまな能力を自由に駆使することができるために、自分こそそうしたさまざまな能力の所有者であるばかりか、自分こそ自分自身の主人であると思ひ込むに至る。

「ところで人間は、自由にふるまうことを通じて、自分自身を確かなものとして経験しながら生きているために、自分をじつさいに自由であると感じているし、事実また、人間は自由なのである。そこで、これらの能力のひとつひとつを自分が望むときに意のままに發揮できるといふ驚くべき力を恒常的に生きている自己は、自分自身がそれらの能力の源泉であると容易に信じ込んでしまう。つまり人間は、それらの能力を自分に与えているのは自分自身である、それらの能力を駆使するその度ごとに、その力を自分自身から引き出ししているのだと想像する。」(p.121)

「自分こそ自分の存在を構成するこれらすべての能力の源泉にして根拠であると信じ込んだ自己は、ついには、自分こそ自分の存在の源泉にして根拠であると信じ込むに至る。」(p.121)

「自分自身に対してまったく受動的である自己」、自分の意志とはかかわりなしに、いのちの内に置かれてしまっている自己、その自己がいまや、少なくとも彼自身の目には、全能の主体、自分自身の主人、言い換えるなら、生ける者、自分の自己、自分の能力や才能、そうしたみずからのあり方のいわば絶対の原理となってしまうたのである。」(p.121,2)

こうした事態が、人間自身に、また人間が生きる世界に、及ぼす影響は計り知れないものがある。

「エゴ（自己）を自分自身の存在の根拠とするこの幻想は、人間が自分自身に対して、また世界や世界の事象との関係において、みずから表象するその自己像を歪めているだけではない。この幻想はまた、絶対の（いのち）においてわれわれがわれわれ自身に与えられている場、すなわちわれわれの（心）をすっかり顛倒させてしまっている。」(p.122)

まずは、人間と絶対の（いのち）との関係が阻害される。もちろん、人間が自分自身をみずからの存在の根拠とする幻想を抱き、人間の真の根拠である絶対の（いのち）を否定したとしても、人間が、つまりは（私）が、絶対の（いのち）によって生かされ、その存在を支えられていることには変わらない。しかし、本来は「絶対の（いのち）」においてわれわれがわれわれ自身に与えられている場」であるところのわれわれの（心）は、絶対の（いのち）に対してみずからを閉ざし、みずからの内

に閉じこもることによって、真のいのちを失った抽象的な主体になってしまう。こうした主体は自己にとつて、自分を超越する存在はあり得ないのであつて、自分こそ世界の中心であり、世界のすべては自分のために存在すると考える。こうした自己中心性、すなわちエゴイズムこそが、この自己の本性である。しかも、この自己は、自分を世界の中心であるとしながらも、絶対の〈いのち〉というみずからの真の存在根拠を欠いた空虚な存在である。それゆえに、この内部にかかえた空虚を満たさうという激しい渴望に苛まれるのであるが、この渴望は外部に投影され、底なしの欲望——所有欲と支配欲——と化する。というのも、この自己にとつてみずからの存在を確かめる方法として、外部の何ものかを所有し、また支配することしかないからである。かくして人間社会はエゴとエゴがせめぎ合う対立と闘争の場となる。

#### (四) この世の成立

「エゴ（自己）」を自分自身の存在の根拠とするこの幻想」によつて、歪められるのは人間性だけではない。人間の生きる世界もまたすっかり変わってしまうのだ。

すでに見たように、世界とは人間の内部から現われるのであつて、世界の広がりとは〈私〉の広がりばかりと一致する。要するに、世界とは本来的に内面空間である。それはすみずみまでのちに満たされた生ける世界であり、それゆえに、〈私〉の情感、喜びや悲しみ、心地よさや苦しみ等によつて染め上げられた世界である。ところが、自己が自分自身を存在の根拠とみなすことによつて、絶対の〈いのち〉から自分自身を切り離すとき、世界もまた自己から分離して、外部世界となる。ここに主観対客観の二元論的世界が成立する。客観としての世界はいのちを失い、それゆえに精神性と情感をまったく欠いた物の世界、質的差異のない数量の世界、延長の世界である。しかし、みずからをみずからの存在の根拠とみなすことによつて、絶対の〈いのち〉から自分自身を切り離した自己にとつて、この外部の世界こそ眞実の世界、現実の世界と思われるのであり、逆に、本来の世界、〈私〉の世界は眞実性と現実性を失い、いわゆる内面の世界、主観の世界、つまりは非現実の世界でしか

なくなる。

しかし、世界は自分の外部に存在し、自分もまたその世界の中に存在しているのだ、という世界観はごく一般的なものであり、ほとんどすべての人間が共有するものである。むしろ、こうした世界観はそれなりの意味と存在理由を持つのであって、こうした世界観なしには、社会生活そのものが成り立たない。そもそも、万人に共通する時間・空間を前提としなければ、われわれは人と待ち合わせすることすらできない。あるいは、そうした実用性において、あるいは日常生活のレベルにおいて、この世界観が便利であり、有効であるがゆえに、われわれはこの世界観を現実そのものと見なすことになる。この世界観とは、日常生活そのものであり、言い換えるなら、人間社会ないしは世間そのものである。それゆえ、この世界観を一概に否定することはできないし、否定する必要もない。問題は、この世界観を絶対と見なすこと、それ以外に世界はあり得ないと断定することである。

世界は自分の外部に存在する、言い換えれば、世界は客観的にそれ自体として存在するという思い込みは、じつに根深いものがある。哲学的思考ですら、その思い込みから自由ではなく、むしろその思い込みを暗黙の前提としている。アンリが批判するのは、まさしくこの思い込みである。そしてすでに見たように、アンリによれば、現われをすべての始原にして根源と考える現象学ですら、この思い込みに囚われたままなのである。アンリは、彼の主著である『現出の本質』の紹介文として、つぎのように書いている（『Essence de la Manifestation, puř. 2e ędition, 1991』裏表紙）。

「現象への問いかけは、現象学にはるかに先立っている。現象への問いかけは哲学とともに開始され、哲学の歴史に沿って哲学と歩みを共にしてきた。ところが、無視できないこうした前提——というのも、存在するとは現われることを意味するのだから——は、ある反省されざる予断によつて多元的に決定されてしまっている。つまり、ギリシアからハイデガーに至るまで、意識や表象についての古典的な問題設定においても、またそれを批判する志向性の現象学やこの現象学を継承する問題設定においても、「現象」が指し示すものは、ある可視化の地平の内部のみならずから現わしめるもの、要するに、ある（外なるもの *Dehors*）の〈脱・自 *Ek-stase*〉にほかならない、というわけである。」

それでも、古代や中世においては、この思い込みは、この世に対するあの世、俗世に対する神の国という対立項によつて、

緩和され、相対化されていた。その場合、あの世ないし神の国とは、じつは、絶対の（いのち）の支配するわれわれの内面世界の表象だったのである。ところが、近代になるに及んで、あの世ないし神の国は、急速に現実性を失い、それは人間の単なる願望の世界、幻想の世界に過ぎないものとなる。近代とは、人間の絶対的主体性が確立された時代、つまりは、人間はみずからみずからの存在の根拠とする存在、みずからの存在を他の誰にも負うことのない自立自存の存在であるとされるに至った時代である。かくして、人間はみずからを生かしている絶対の（いのち）からますます離脱し、それゆえにまた、絶対の（いのち）の表象としてのあの世、神の国の現実性が増す薄れてゆくことになる。世界とは、人間という絶対の主体＝主観に對して現われる世界でしかなく、この外部の世界だけが唯一の世界、つまりは現実世界そのものとなる。

科学が近代に始まる学問であることも、以上のことと密接にかかわっている。科学とは何か。それは、おおよそつぎのように定義できるだろう。すなわち、世界をひとつの等質的時間・空間として客体化し、世界のあらゆる存在を物質として捉えたうえで、人間の精神生活をも含めたあらゆる事象を、世界に存在する物質同士が織りなす因果関係の無限の連鎖と見なし、この因果関係を正確に把握することによって、それらの事象を解釈する方法である、と。しかし、科学が前提とする世界、すなわち無限の等質的時間・空間としてある世界が成立するには、まずそれを成立させる主体が必要である。しかもこの主体とは、世界から完全に独立し、自分みずからを根拠とする絶対的主体でなければならない。では、そのような主体になり得るのは、いったい誰なのか。ほかでもない、われわれの自己、しかも自分を自分自身の根拠とする絶対的主体であることを自負する自己である。たしかに、われわれの自己はある意味において絶対の主体であり得る。しかし、それはあくまで絶対の（いのち）を根底・根拠とする主体性、つまりは絶対の（いのち）から借り受けた主体性にほかならない。それゆえ、絶対の（いのち）の否定のうえに立つこの自己の絶対主体性とはあくまで抽象概念に過ぎないし、そのような形で絶対の主体であることを自負する自己も抽象的存在に過ぎない。科学が前提とする世界とは、こうした自己を主体として成立した世界であって、その自己が抽象的存在であるのと同様に、それによって成立する世界もひとつの抽象的世界にほかならない。それはひとつの世界像、世界観であって、けっして真実の世界、現実の世界なのではない。しかし科学こそ、真実の世界、現実の世界を捉える唯一絶対の方法であるという信仰は、現代に至るまで根深く残っており、現代の人間観、世界観はこの信仰によって極端に歪められたま

まである。自分の対象としてある世界、自己の外部にある世界だけが唯一絶対の世界であるとすれば、自己そのもの、人間自身もまた、この世界の中に、この世界の一部分として在る存在であるほかなくなる。それゆえに、自己＝人間もまた、この世界を支配する法則、つまりは科学的法則によって支配された存在、科学によって完全に解明され、説明され得る存在と見なされる。

しかし、こうした科学的人間観、世界観は、ひとつの人間および世界の捉え方として、それなりの有効性と真実性を持つのは事実としても、この人間観および世界観にはひとつの重大な欠落がある。その欠落とはまさにいのちの欠落である。この人間観および世界観は、人間と世界の根拠であり、根源であるところの〈絶対のいのち〉を否定し、排除したところに成り立つものなのである。科学によって捉えられる人間とは、まさにいのちを失った抽象的存在に過ぎない。たしかに、科学的な人間観にもそれなりの意味はある。しかし、それが唯一絶対の人間観、つまりはそれこそ真の人間であると見なされるに及んで、いのちを持つ生きた存在としての人間は否定される。むしろ、それでもなお、人間が絶対の〈いのち〉によって生かされていることには変わりないが、少なくとも、その絶対の〈いのち〉は人間の意識からは排除されてしまうのであり、そのことが人間の心や精神に及ぼす影響は計り知れないものがある。そもそも、絶対の〈いのち〉が意識から排除されるということは、人間がみずからの真の根拠を、それゆえにみずからの真の本性を、見失うことを意味する。

キリスト教、すなわちキリストの教えとは、まさしく、人間の真の根拠、真の本性としての絶対の〈いのち〉をわれわれに想起させ、それによって、われわれが失ってしまった絶対の〈いのち〉との交流、結びつきをふたたび回復させようとするものである。かくして、人間はいのちを取り戻し、〈新しい人間〉として生まれ変わる。復活とはそのことであって、それ以外のことではない。復活とはわれわれが本来の人間に戻ることである。

「この〔キリストの〕教えは、真の人間、人間の真の本性というものが、われわれが普通考えているのとはまったく別の場所に潜んでいることを明かしてくれる。われわれの素朴な考えでは、人間は世界の中に存在し、世界の法則に従属する経験的個人に過ぎず、自分自身の本質をなすはずの情念の内面性をことごとく奪われ、今日われわれが目当たりしているように、あらゆる学問的還元——心理学、社会学、政治学、生物学、物理学、等々——に従順に受け入れられる単なる物体に成り

果てているが、キリストの教えは、まさしくこうした素朴な考えから人間を解放するのだ。」(p.146)

しかし、自己の対象としてある世界、自己の外部にある世界、それ自体として存在する客観的世界こそ唯一の世界だとする信仰は、単に人間自身に作用を及ぼして、人間のあり方、人間の生き方を歪めているだけではない。この信仰は、世界そのものにも深刻な影響を及ぼさざるを得ない。というのも、先に見たように、この信仰の核となっているのは、人間がみずから自分自身の存在の根拠とみなすことによって、みずからを絶対的主体として自己定立するという事実である。それゆえに、この信仰のうえに成立している科学がいかに客観性ないし中立性を標榜するとしても、それはあくまで人間の自己中心性、つまりは人間中心主義に基づいているのであって、この人間の自己中心性、人間中心主義は、容易に人間のエゴイズムに変貌し得るのである。こうして科学は、人間が世界の主人となり、世界を所有し、支配し、管理し、制御するための手段と化す。今日、もはや美しい生ける自然は存在せず、人間に役立つ資源としての、搾取と乱獲の対象としての、つまりは物としての死んだ自然しか残されていない。現代の荒廃した自然、環境破壊なるものも、人間の自己中心性、人間中心主義がもたらしたものである。そもそも、環境破壊という場合の「環境」という言葉自体に人間中心主義的な発想が込められているのであって、そうした発想を根本的に転換しないかぎり、本来の意味において、美しい生きた自然は回復しないであろう。現代の最大の課題は、こうした自己中心性、人間中心主義という人間がみずからを閉じ込めた閉域をいかに打ち破るかということであろう。

### (五) 世界の言葉と〈いのち〉の言葉

「人間とは何かという問題は、人間をみずからの圏域——あらゆる形態の人間中心主義に付随する監禁状態——に閉じ込められた存在として捉えるか、あるいは〈神の言葉〉を開き取り、神に向かって開かれた存在として捉えるか、によってまったく違ってくる。後者の考えからすれば、人間という存在は、神と呼ばれるところの〈真理〉と〈愛〉の絶対存在との内的関係においてしか、真に理解し得ないのである。」(p.15)

それでは、〈神の言葉〉とはいったいどのような言葉なのか。それは、人間の言葉、すなわち人間が通常使っている言葉とどこがどう違うのか。ところで、人間の言葉の特徴づけるのは、何よりもまず、その指示的性格であろう。

「あらゆる言語、あらゆる語は、自分の外にあつて、自分とは異なる内容に係る。したがつて、語はそれが指し示している現実そのものではなく、ただその現実を目に見えるようにしているだけである。「犬」という語は、現実の犬を指し、また意味するが、その語自体はどこまでも語でしかなく、その語の中にはいかなる現実の犬も存在しない。その語は現実の犬を示すだけであり、〈空虚の内に〉それを意味するに過ぎない。要するに、語は〈空虚な意味〉である。語には自分が指し示す現実を創り出すことができないということ、それがここで問題にしている言語のもつとも一般的な性格である。私が「ポケットに百ユーロ紙幣を持っている」と言つたところで、それを実際に所有するわけではない。」(p.92)

しかし、そうした指示的性格は、あらためて取り上げるまでもなく、およそあらゆる言葉が持つ普遍的な性格ではなからうか。そもそも、指示的性格を持たない言葉などというものがあり得るのだろうか。

だが、すべての言葉は指示的性格を持つという一般通念、言い換えるなら、語は自分以外の何か、自分の外にある何かを指す記号以外ではあり得ないという思い込みは、ひとつの世界観を前提にしている。それは、世界とは自分の外にあり、そしてすべての事物はこの外部の世界において現われる、あるいはこの外部の世界において現われる物だけが現実である、とする世界観である。たしかに、どんな言語であれ、現われるものしか語り得ないだろう。しかし、われわれが通常使っている言葉は、世界という外部性において現われてくるものだけを語る言葉なのである。それゆえにアンリは、われわれが通常使っている言葉を「世界の言葉」と呼ぶ。

「われわれはわれわれに現われるものしか語ることができない。言葉の可能性の条件としてのこの〈現われ〉こそ、かつて古代ギリシア人がロゴスと呼んでいたものである。このように、言葉の可能性が〈現われる〉ことにあるとすれば、その言葉の特性とは、〈現われ〉の特性そのものに大きく影響されることになるだろう。しかも、この〈現われ〉が世界の現われ、つまりは距離を置くこと、外部性（この外部性の光の中でこそ、われわれは語り得るすべてのものを見る）にはかならないとするなら、世界の言葉の特性は、必然的に、世界自体の特性に依存することになるだろう。」(p.90,1)

アンリによれば、そうした世界の現われは以下のような三つの根本特性を持つ。

「まずは、この〈現われ〉は純然たる外部性の領域であるから、そこにおいて現われ、目に見えるようになるあらゆるものは、ことごとく外部のものとして、つまりはわれわれとは別なもの、われわれとは違うものとして現われるが、そうして現われなくては、目に見える世界を構成する事物——感覚的であれ、精神的であれ——の総体である。」(p.91)

「第二に、世界の現われは、世界に現われるすべてのものを外部のもの、他のもの、異なったものにしてしまうだけでなく、まさにそのことによって、それらすべてのものが、世界にとつては、まったく無縁のもの、無関心なものとなる〔…〕しかもそうしたすべてが、まったく同じように、恐るべき中立性において、われわれに現われる。それらは等しく事実と呼ばれ、その客観性において——現代という時代、そして現代の科学は、この客観性を大いに誇りとしている——、これらすべての事実はまったく等価である。」(p.91)

そして三番目の特徴。

「世界の現われが、自分が現わすことに無関心であるのは、さらに深い理由からである。すなわち、この〈現われ〉は、みずからを存在せしめる能力、みずからの存在を創り出す能力を持たないということである。外部性そのものとなった世界は、空虚な場所、内容を欠いた地平でしかない。「見えるようにすること」——この純粹に空虚な場の光の中ですべてのものを見えるようにすること——は、そこに見えるものをどうすることもできない。電車の窓辺に肘をつけて外の景色に見入る乘客のように、自分の無力な眼差しの前に繰り返される光景をながめるだけのことである。」(p.91)

われわれ人間が普通に使っている言語、アンリの言う世界の言葉は、まさしく以上のような世界の現われの根本性質をそのまま引き継いでいる。

「世界の現われが純然たる外部性の領域であり、そこではすべてが外部のもの、他なるもの、異なるものとして現われるように、世界の言葉——世界の中に見えるものを語る言葉——もまた、必然的に、自分とは別のもの、自分の外にあるもの、自分とは異なるもの、自分とはまったく無関係なもの、自分の力がまったく及ばないもの、について語る。」(p.91.2)

以上が、われわれ人間が普通に使っている言語、世界の言葉の根本特性がその指示的性格にあるということの理由であり、

先に述べたように、こうした言語にあっては、語はそれが指し示している現実そのものではないし、ましてや、語はそれが語る現実を創り出すわけでもない。

アンリによれば、以上のような乏しい言語、世界の言語だけを唯一実在する言語と見なしていることに、現代の言語理論の致命的欠陥がある。

「現代の言語理論は、目に見える世界が唯一真なる現実の領域であり、それゆえまた知や言語の唯一の対象であるとする素朴な信仰に欺かれている。そうしたことから、現代文化は大きな欠落をかかえ込んでしまっている。世界の言葉よりもっと根源的で、もっと本質的なもうひとつの言葉、いのちの言葉が完全に隠蔽されてしまっているのだ。」(p.92)

たしかにわれわれは、普段、世界の中に、つまりは外部の世界に生きている。そして世界の中に生きているかぎり、われわれは世界の言葉を使わざるを得ない。しかし、この世界は、つまり外部の世界は、それが唯一絶対の現実というわけではない。すでに見たように、われわれ人間は本来的にこの目に見える世界に属しているわけではなく、それゆえ、われわれの真の現実の世界には存在しない。われわれは〈いのち〉から生まれ、〈いのち〉の中に生きているのであって、それゆえに、われわれ人間は、何よりもまず、〈いのち〉に属する存在なのである。では〈いのち〉の根本性質とは何か。それは、〈いのち〉とはそれ自体がひとつの現われであり、自己啓示にはかならない、ということである。

「いのち、われわれが自分自身の内で経験しているいのちとは、それ自体がひとつの啓示なのである。そしてこの啓示のユニークな状態において、啓示する主体と啓示されるものとは同じひとつのものであり、それゆえにわれわれはそれを自己啓示と呼んだのである。このような啓示の様態は、いのちだけに備わるものであり、まさにいのちの本質をなしている。じつさい、生きるとは「自分自身を感受すること」「自分を自分に明かすこと」にほかならない。」(p.93)

ところで、先にも見たように、言葉と現われのあいだには本質的な関係があり、言葉とはみずからに現われるものしか語り得ない。とするならば、それ自体が現われである〈いのち〉はそれ自身の言葉を容易に持ち得るだろう。

「〈いのち〉がひとつの啓示である以上、いのちはいのち固有の言葉を生み出すことができるのではなからうか。そしてさらに、いのちの啓示というものがいのち自身の啓示であるとするなら、この言葉がわれわれに語るのも、すでに明らかではな

かろうか。いのちは、みずからをみずからに啓示することによって、われわれにいのちそのものについて語る。」(p.93)  
キリスト教、すなわちキリストの教えの根本は、世界の言葉とは別のロゴスがあり得るということである。

「ひとつの啓示にはかならないロゴス。しかも、その啓示とは世界の現われとしてのそれではなく、〈いのち〉の自己啓示なのである。いのち自身がその可能性であるところの言葉、その中でいのちが、みずからをみずからに啓示することによって、いのち自身を語ると同時に、その中からわれわれ自身のいのちも絶え間なくわれわれに語りかけてくる言葉。」(p.94)  
要するに、いのちそのものが究極の言葉そのものなのであり、いのちという言葉においては、言葉と言葉が語る内容がひとつなのである。このことは、われわれ自身の生において、われわれの生のあらゆる様態において、疑おうにも疑い得ない体験として、認めざるを得ない。たとえば、苦しむという体験を取り上げてみよう。

「苦しみは苦しみを味わう。だからこそ、われわれが苦しみを知るには、われわれ自身が苦しむほかないのだ。そのようにしてのみ、苦しみはわれわれに語りかけるのであり、苦しみは、その苦しみにおいて、われわれに語るのである。そのようにわれわれに語りかけることによって、苦しみがわれわれに語っているのは、苦しみが苦しんでいるのだ、ということにはかならない。」(p.94)

だが、苦しみは苦しみだけを語っているのではない。苦しみはいのちという言葉のひとつの語なのであって、苦しみは苦しみを語ると同時に、いのちそのものを語っている。むしろ、それは苦しみだけに当てはまることではなく、われわれが生きている生のあらゆる様態について言えることである。喜び、悲しみ、苦悩、絶望、満たされなかった欲望、努力や努力に伴う充実感、あるいは徒労感。

「だが、われわれの生の実質をなすこうしたあらゆる感情を通じて語っているのは、これらの感情がその内部においてみずからに与えられ、みずからを味わい、みずからに明かされるところの全能なる力、つまりはいのちの自己啓示のものにはかならない。それが、原初の言葉、ヨハネが神の〈言〉と呼んでいるものの根源的かつ始原的な啓示である。」(p.95)

このように、いのちはわれわれが味わうあらゆる感情的色調を通じてわれわれに語りかけてくる。というよりも、そうしたあらゆる感情的色調とは、いのちがわれわれの内でもみずからを啓示しつつ、われわれに語りかけてくる、さまざまな様態には

かならないのである。それゆえに、われわれのいのちがその中で絶えず変化しつつ、われわれに語りかけてくる、こころした感情的色調の真実性とは、〈いのちの真理〉なのである。だが、いのちとは真理のひとつなのではない。いのちとは究極の真理、それなしにはいかなる真理もあり得ない絶対の真理なのである。

「なぜ、真理はいのちに基づき、いのちに属している、と言えるのか。いのちが真実であるのは、いのちがみずからをみずからに啓示する、この自分自身の啓示——つまりは自己啓示——がおよそ考え得るあらゆる真理の基盤となるからである。じつさい、われわれに現われなにかぎり、何ものもわれわれにとつて存在しない。しかしそのためにはまず、現わすことが現われなければならない、つまりは啓示自体が啓示されなければならないが、〈いのち〉の本質そのものと言つてもよいあの自己啓示においてなされているのは、まさしくそのことなのである。」(p.98)

ここでもう一度、世界の言葉といのちの言葉の違いを確認しておこう。世界の言葉においては、言葉が自分とは別のものを、つまりは外部性の無関心の中に現われたものをいわば傍観的に語るのに対して、いのちの言葉が語るのは、ある感情の中のいのちがその中でみずからを味わう感情の中である。いのちの言葉は世界の言葉とは何の関係もない。たとえば苦しみは、どんな意味も、また意味の担い手である文字のないし音声的記号も、まったく必要とせず、けっして自分の外に出ることなく、自分自身の内部から、われわれに語りかけてくる。要するに、世界の言葉と対比して、いのちの言葉の特徴づけるのは、その「内在性」である。

「内在性とは、いのちが、外部世界においてではなく、自分自身の内で直接自分自身を味わう原初的感受性であつて、意味や概念とはまったく異質の、印象のないし情動的現実であり、つまりは感情的な〈肉〉〔chair〕なのである。いのちがひとつの言葉、自分自身を語る言葉であるのは、ひとえに、いのちが自分自身を味わいつつ、その原初的感受性という内在性において、情動的にみずからをみずからに啓示するからにはかならない。」(p.98)

ところで、すでに何度も述べたように、キリスト教の神とは〈いのち〉そのものである。逆に言えば、キリスト教では、すべての始原としての〈いのち〉を神としているのである。このように、「神はいのちである」とすれば、われわれは神とは何かをすでに知っているはずである。むしろ、〈いのち〉である神は、われわれの思考や感覚によってはけっして知り得ない。〈い

のち)である神は、人間とは切り離された外部の世界に客観的に存在する何ものかではないからである。

「神が(いのち)であることをわれわれが知っているのは、われわれが生ける者であるからであり、またいかなる生ける者も、自分の内にいのちを保ち続けないかぎり、生きることはできないからである。しかも生ける者は、そのいのちを、自分にも知り得ない秘密としてではなく、自分が絶えず感じ取っている当のものとして、つまりは自分の本質、自分の現実性そのものとして、知っている。」(p.104)

だがそれにしても、われわれにいのちを恵み、われわれを生かしてくれるこのいのち、絶対の(いのち)は、いかにそのいのちを、つまりは自分自身を生み出すのだろうか。アンリによれば、「ヨハネによる福音書」のプロローグは、まさにこの究極の問いに答えている。

「ヨハネが神と(いのち)を同一視しているということは、この絶対の(いのち)というものを、(いのち)がみずからに到来する、つまりは(いのち)がみずからを生み出す、その永遠の運動として理解していることにはかならない。(いのち)の自己産出(auto-generation)とは、いのちがいのちであること条件、つまりは自分自身を感じ取るという条件のもとに、いのちが到来するということである。ところで、自分自身を感じ取るということは、いのちの中に自己性(ipseité)というものが出現しないかぎり、およそあり得ないことである。いのちはこの自己性においてこそ、みずからをみずからに啓示するのであり、このみずからの啓示において、(いのち)は(いのち)になる。」(p.106)

そして、この自己性こそ(最初の生ける自己)なのであり、この(最初の生ける自己)のうちにおいて(いのち)の自己啓示がなされるがゆえに、この自己は(いのちの言葉)にはかならない。

「このように、(いのち)の永遠なる自己産出は、みずからの内に、(言)を、つまりは(最初にして唯一の子)を生み出すのであり、その(言)＝(子)の内において、(いのち)はみずからを受感しつつ、自分みずからを永遠に愛する。[...]神は(言)として自分自身を生み出す。」(p.106)

それが「言の内に命があった」(プロローグ・四)ということの意味である。それゆえに、(言)は(いのち)の後に到来するのではない。(いのち)の内にあるこの(言)によってこそ、(いのち)はみずからの内に到来し、みずからをみずからに啓

示し、みずからを享受することができるのである。〈言〉と〈いのち〉は不可分にして同時的存在である。

「初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。〔…〕言の内に命があった。」〔ヨハネによる福音書〕一・一  
・四

言うまでもなく、この〈言〉＝〈子〉こそキリスト自身にほかならない。そして、〈父〉——みずからを生み出す全能の〈いのち〉——と〈子〉——その内において〈いのち〉がみずからを感受しつつ、みずからをみずからに啓示するところの〈言〉——との関係はどこまでも相互内在の関係である。

「このように、〈父〉は〈子〉においてあり、〈子〉は〈父〉においてある。この相互内在性（それぞれ、相手の内において、自分を感じ、生き、自分を愛する）とは愛の内在性であり、そしてこの愛の内在性こそ、両者を繋ぐ〈愛〉、すなわち〈霊〉である。」(p.108)

おわりに——人間の条件の顛倒

『キリストの言葉』が伝えるメッセージを一言で要約すれば、「人間は〈神の子〉である」ということである。ただし、ここで言う神とは、〈いのち〉としての神、〈いのち〉である神である。人間は、この〈いのち〉である神から生まれ、そして生きているかぎりにおいて、この神である〈いのち〉に於いてある。そればかりか、人間ひとりひとりの〈私〉もまた、神の〈私〉から直接生まれ、また神の〈私〉を根拠にして〈私〉であり続ける。

もし以上のことが真実であれば、人間の条件はまさに顛倒するであろう。人間は、一般常識として考えられているように、外部の世界から生まれ、そしてその世界の中に生きているのではないし、それゆえにまた、人間とは世界の状況、世界の条件に絶対的に支配されている存在ではない。もちろん人間は、ほとんどの場合、外部の世界に生きており、その状況や条件に圧倒的に支配されていると言わねばならない。しかし、外部の世界というものが実在するわけではなく、それはあくまで、人間

自身が造り出したひとつの世界像にはかならない。そもそも、外部の世界が唯一真なる世界であるとすれば、人間存在はその世界の状況や条件に必然的・絶对的に支配されていることになるが、そうであるとすれば、いかにして人間の自由ということの説明できようか。自由とは、すなわち主体性ということであり、しかもこの自由＝主体性こそ、〈私〉という人間の本质ではなからうか。この人間の本質、〈私〉の本質であるところの自由＝主体性というものを、外部の世界を真の実在、唯一の現実とする考えから、どのように導き出すことができるだろうか。さらには、人格あるいは人間性ということについても、同じことが言える。人格あるいは人間性というものも、自由意志を前提としないかぎり、およそ考えることはではない。人間ひとりひとりのかけがえのなさ、ひとりひとりの〈私〉の唯一無二性ということについても、同様に、外部の世界が真の実在、唯一の現実であるとする考えからは、絶対に導き出すことはできない。人間存在というものが外部世界の絶对的支配下にあり、その論理やメカニズムによって完全に決定され、規定されているとするなら、逆に言つて、そうした論理やメカニズムに忠実に従えば、どんな人間であれ、ロボットのよう再生が可能だということになる。つまりは、どんな人間であれ、置き換えが可能であり、「かけがえがある」ということになる。もしクローン人間が誕生するなら、本物とクローンは区別できず、両者は同一人物であるということにならざるを得ないだろう。要するに、外部世界を真の実在、唯一の現実と見なすかぎり、人間が自由意志を備えた一個の人格であり、ひとりひとりがそれぞれにまったく異なるかけがえのない存在であるということの根拠を、われわれはどこにも見出すことはできないのであり、そうであるかぎり、それはあくまで現実性を欠いた理想や理念にとどまらざるを得ない。

しかし、人間が自由意志を備えた一個の人格であり、ひとりひとりがかけがえのない存在であるということは、けつして根拠や現実性を欠いた理想や理念ではない。というのも、人間＝〈私〉は、もともと、外部の世界に属さない存在、外部の世界とは別の場所から生まれ来った存在なのである。その別の場所とは、〈いのち〉である神、神である〈いのち〉にはかならない。人間は〈神の子〉であり、神自身であるところの〈いのち〉、すべての始まりであるところの〈いのち〉から直接生まれ、しかも生きていくかぎり、この〈いのち〉の中にある存在なのである。言い換えるなら、人間のいのちも、人間の〈私〉も、神自身であるところの〈いのち〉、神自身であるところの〈私〉から、みずからの存在を借り受けている、あるいは譲り受けて

いるのであり、たつた今もなお、人間のいのち、人間の〈私〉は、その根底において、神の〈いのち〉、神の〈私〉によって生かされ、在らしめられている。

同様にまた、人間の人格、人間の自由意志、人間の愛ということも、神の人格、神の自由意志、神の愛なしは考えられないだろう。神は完全なる存在、みずからの力で存在し、自分のためには他のものを一切必要としない存在であると考えられるから、神は人間と世界を創造するいかなる必然的理由もなかつたはずである。それを敢えて創造したのは、神の自由意志であり、純粹な愛からであつたとしか考えられない。このように、神とは自由意志を備えた一個の人格であり、純粹なる愛が神の人格の本質なのであるが、しかも、そのような神が「ご自身にかたどつて人を創造された」のである。それはつまり、神は人間を、自分と同じように、自由意志を備えた存在、愛することのできる存在として生み出したということである。このように、人間の人格とは神の人格の像にはかならない。

そんな考えは、いわゆる神人同型説であつて、人間の人格や人間性を架空の神に投影したものに過ぎない、というのがごく一般的な考えであろう。しかしそれならば、人間のいのち、人間の〈私〉、人間の人格、自由意志、愛といったものを、いったいどうやって説明しようと言うのか。たしかに、外部の世界、客観的世界、物質的世界から、どのように生命が誕生し、それがどのように進化発展してきたかが、いかにもまことしやかに説明されている。ところが、それはあくまで生物の外形をなぞつたものに過ぎず、生命の本質をなすところの自己性、すなわち〈私〉については何ひとつ説明されていない。たとえば、何かを見ると言うことに關して言うなら、眼の構造とか視神経の働きなどは、テレビやカメラの構造やメカニズムのようなものとして、詳しく説明されている。しかし、人間がテレビやカメラと根本的に違うのは、テレビやカメラはみずからが写し出した映像をけつして見ないのに対して、人間は自分の眼が写し出した映像を見ているということ、つまりは見ている〈私〉がいるということである。そしてこの「見ている私」だけは、眼の構造や視神経の働きをどれほど詳しく分析しようと、どこにも発見されない。

「私」の存在も、心の存在も、外部の世界、客観的世界、物質的世界の因果関係やメカニズムから説明することはけつしてできない。そしてこのことは、〈私〉も心も、外部の世界、客観的世界、物質的世界から生まれたのではないことを、おのず

から示している。(私)も心も、外部の世界、「この世」には属さない。死を前にして、キリストは、弟子たちについて、「わたしは世に属していないように、彼らも世に属していない」(「ヨハネによる福音書」十七・十四)と言ったが、キリストの弟子たちばかりでなく、人間はすべて、もともと、この世に属していないのである。人間は誰もが、「神の子」として、また「神の似像」として、生まれ、存在している。

最後にもう一度、アングリの言葉を繰り返そう。

「生きた人間のひとりひとりのうちには絶対の(いのち)が内在しているのであり、この全能の(いのち)のことを、キリストは「父」と呼んでいる。彼は人々に言う——「あなたがたにはひとりの父、天におられる父しかいない」。ここで言われている「天に」とは、言うまでもなく、星が瞬く天空、宇宙飛行士たちが探検し、宇宙船の窓から眺めて、神は見えなかったと言った宇宙空間のことではない。「天に」とは、その内部であらゆる生ける者が生きている(いのち)の中ということであり、そこにおいては、この(いのち)と同様、生ける者たち自身も目に見えないのだ。以上が、人間とは何か、また人間の真の条件とは何かということの新しい定義である。」(p.54)